

新・農業経営者ルポ／第171回

農家民宿を文化と交流の発信源に

農家民宿を文化と交流の発信源に

愛媛県は内子町に、朗読会や演奏会、コンサートから地元の人の誕生会に至るまでさまざまな用途に使われる農家民宿がある。森長照博（75）・禮子（70）夫妻の経営する「ファーム・イン RAUM（ラオム）古久里来（こくりこ）」だ。年間の利用者約1500人のうち、1200人が宿泊ではなく、交流の場として利用する。木々の緑に囲まれた宿は、宿泊客のみならず、地元の人も気軽に上がれる造りで、四半世紀の間に地域のコミュニティホールとしてすっかり定着した。

文／窪田新之助・山口亮子、写真／山口亮子

内子町の市街地から車で小田川沿いを上流へとさかのぼると、両脇から山が迫り、川と山に挟まれた狭い平坦地に田んぼや畑、民家が続く。街中から5分ほどの近さに広がる牧歌的な空間に、森長夫妻の経営する古久里来はある。

取材で訪れたとき、照博は母屋のダイニングでマイクなどの音響機器を片付けている最中だった。

「毎年、プロの方やそのお弟子さんたちにしていただいている朗読会で宿泊されていたお客様方が今日のお昼に帰られたばかりです。一昨日の朗読会には地元や東京から40人がお集まりくださいました」（照博）

森長夫妻の住居と食堂が一緒になった母屋は四周が緑の木々に囲まれており、まるで森の中にあるような印象を受ける。庭を挟んで向かい側には、2階建ての円筒形で大木の幹を思わせる外観をした宿泊棟がある。ダイニングには、広葉樹の木々の茂る庭を眺める大きな窓が切り取られている。周囲の景色も楽しめる朗読会はさぞ雰囲気があっただろう。

農家民宿が文化の発信地

出演するのは、プロのナレーターを筆頭にいずれも演劇学校などで朗読を学んだことのある経験者ばかりだ。前後の4日間は4部屋計8人が泊まれる宿泊棟は満室で、遠方からの参加者のために近隣の宿を紹介したという。内子町は歌舞伎座が残るなど文化の香りの強い町ではあるが、全国から朗読をするため、あるいは聞くために訪問する人がいることに驚かされる。

これはプロのナレーターの女性が古久里来を訪れ、「ここで朗読したいわ」と言ったのがきっかけで始まったものだ。以来、毎年開いている。「もう12年続いているんですよ、ありがたいことに」と照博が言うと、「出演料はないんです」と禮子が手弁当だと説明する。

今年は藤沢周平の短編集『橋もの』の「約束」を朗読した。休憩なしで長時間続いたが、抑揚の効いた語り口に聴衆が引き込まれ、会場は水を打ったように静かで語り手の声だけが響き渡っていたという。

「今年の内容もすごかったね。良かったってもんじゃない、大感動でしたって皆さんが喜んでくださった」と照博が禮子に話しかける。禮子は「自分たちも楽しみなんです。この宿のコミュニティホールをこんなに素敵な使い方をしてもらうのが嬉しい」と言い、「参加者と話が弾んで、夜も12時を過ぎてしまうんです。ちょっと寝不足ですね」と笑った。

照博が参加するアマチュアによる朗読会も定期的に開いており、こちらは昨年12月に90人が参加したという。ピアノの置かれたダイニングはこうしたイベントでの利用が多く、定期的に開いているものとしては春の観桜会コンサート、秋の観月会コンサート、琴の演奏会などがある。他にも食事会やホームパーティー、珍しい用途だとフランス語教室をここで定期的に開いてきた人たちもいるという。

「愛媛県内の中予と南予地域の人たちがちょうど地理的に集まりやすいところで開こうと。今は少し教室をお休みしているようですが」（照博）

さまざまな目的で人の集まる場所



ファーム・イン RAUM 古久里来
森長照博、禮子
愛媛県内子町

もりなが・てるひろ　1943年、愛媛県内子町生まれ／もりなが・れいこ　1948年、愛媛県松山市生まれ。禮子が代表となり、95年に農家民宿「ファーム・イン RAUM 古久里来」を開業。照博は経営のために愛媛大学でマーケティングを学んだ。禮子は2008年、「農林漁家民宿おかあさん100選」に選出される。

になっているのだ。ダイニングの手前の土間にはカウンターテーブルが置かれ、喫茶スペースになっている。「地下足袋でも上がれる場所に」（照博）という思いで造ったもので、地元の人と宿泊客が気軽に訪れられるよう設計した。

「ファーム・イン」は英語で農家の簡易宿泊所です。RAUMはドイツ語で、空間という意味なんです。空間というのをあえて名前に入れたかったのは、この古久里来の空間をお客様が自由にお使いになってリフレッシュして帰っていただければいいなと。そういう思いを込めました」（照博）

コミュニティホールとしての役割を果たすということを、創業当初からのコンセプトとして持ってきた。施設自体、社交場として使われるように設計し、積極的にイベントを開いたり周囲の人に使ってもらったりしてきた。


「来るものに安らぎを、去りゆくものに幸せを」与えたいという。


宿泊棟と母屋を結ぶ渡り廊下は夜に寝転んで星を眺められる。

まず自分たちが心豊かに

照博が大切にしている言葉がある。「近きもの悦び、遠きもの来たる」

これは論語の言葉で、政治の要諦とは何かと問われた孔子が答えたもの。兼業農家でコメや野菜を栽培しつつ、公務員として特に内子町のまちづくりにかかわる中で「これこそがまちづくりの要諦だ」と思った。

「地域の内子町の人が楽しんで心豊かに生活できる。暮らしが安心・安全で、コミュニティがしっかりしている。そうしたら、遠方からでも人は訪ねてくるものなんだよということですね」（照博）

母屋の2階にあるギャラリーにも、この言葉を墨書してもらったものを飾っている。朗読会にしても、「自分たちで楽しむ会でもあるんです。私たちにとってもありがたい」（照博）という。出演者と参加者には「内子の文化をだんだんと高めてくださっているんだと感謝しているんですよ」（照博）。自分たちが心豊かに暮らす手助けを都会から訪れる人々がしてくれているというのだ。

お客様に楽しんでもらい、自分たちも楽しむのに加え、近隣住民とも分かち合うという姿勢だ。野菜も栽培しているが、食事に必要なものをすべて自前で賄うことはしない。足りない食材があると、近所の農家や近くにある直売所の「からり」から仕入れる。

「なぜかというと、たとえば大きなホテルに行ったら、バーがあったり、カフェがあったり、おみやげがあったり、そこから一歩も出なくても全

農家民宿を文化と交流の発信源に



農家民宿に求められるいわゆる農業体験もいいが、宿でうたたねするのも立派な文化の体験と考えている。

部そこで済んでしまうんですよ。そうしたらホテルの中でだけしかお金や人が回転しませんよね。でも、私たちは地域と共にあるという考え方なんです。地域の中でお金が循環しなければいけないという考え方ですね」（照博）

レタスやハーブといったよく使う食材も、生産している農家から購入することが多い。

「地域と共になければグリーンツーリズムの意味がないです。内子町のみなさんと共にあるという考え方が根底にあります」（照博）

内子町では82年に観光ブドウ園が開業しており、観光農園の開始が早い。農家民宿が10軒以上あり、グリーンツーリズムの盛んな土地として知られる。グリーンツーリズムの普及には、開業の早かった森長夫妻が成功例を示したことも一役買っている。

「町内の農家民宿はおもてなしのレベルが通常の農家民宿よりも高いところが多い。これは古久里来さんの影響があるでしょう」

こう話すのは内子町役場グリーンツーリズム係の稲月道隆（46）だ。国内でグリーンツーリズムという考えが普及するきっかけになったのは、94年の農村休暇法（農山漁村余暇法）の制定だった。翌95年に農林漁業体験民宿、いわゆる農家民宿の登録が始まる。グリーンツーリズムという言葉が知られる前から、森長夫妻はなぜグリーンツーリズムに注目したのだろうか。

「絹のブラウス」を着た農家の女性たち

照博は「30年ほど前にヨーロッパのグリーンツーリズムを見に行きませんかと」と学者から誘われたと振り返る。当時、照博は兼業農家で内子町の町役場に勤めていた。町づくりに携わっており、地域活性化に詳しい学者らと交流があった。

イギリス、オーストリア、スイス、ドイツ、フランスを回り、農家民宿を経営している女性たちが生き生きと働いているのを目の当たりにした。照博は宿を切り盛りするおかみさんたちがキラキラしていて「農家の女性たちが『絹のブラウスを着ている』と感じた」と表現する。

「グリーンツーリズムが定着していて、『アグリツーリズム』とか『アグリツーリズモ』という言い方をしていました。ヨーロッパの女性たちが生き生きとしているもんですから、日本に持って帰ってもいけるんじゃないかと思ったんですね」

このときの視察は照博だけが参加した。写真を800枚ほど撮り、「帰ってから家内にも見せて、向こうの農家の女性たちはこんなに元気で頑張っているよ。やってみてはどうかと話をしましたら、やってみようかということになりました」

開業の方針が決まってからは企画を練り上げていった。

「設計に1年くらい、ずいぶん時間がかかりました。というのは、『グリーンツーリズムとは何か』というところから始まらないと設計ができないですから。今みたいにグリーンツーリズムという言葉が定着していないときでしたから、設計事務所に家内と一緒に夜、通ってグリーンツーリズムの趣旨を話して理解してもらって、設計図ができたんですよ」

設計図も二度書き直してもらい、三度目のものでやっと採用した。農家民宿では家をそのまま使うか、ある程度改装して使うところが多いのに対して、建物も庭もゼロから造った。民宿はふすま一つしか隔てるものがないことがままあるが、これからの時代、宿泊客のプライバシーが守れなければならないと考えたからだ。まるで森の中にいるかのような印象を受ける空間にしたのは「お客様が何を求めて旅をされるのか考えたときに、それは非日常ではないかと。森の中にある宿もいいんじゃないかと思ったんです」（照博）

建設のために15年のローンを組んだ。

「最初にかかった費用がかなりの金額でしたから、あとからかまどだとか五右衛門風呂とかピザを焼く石窯とか造ってきたんです。今もだんだんとでき上がってきているという状況です」（照博）

開業にあたって作り上げたコンセプトは四半世紀近くを経ても変わっていない。それは冒頭に紹介した「コミュニティホールの役割を果たす」に加え、「リフレッシュしてもらう」、「インフォメーションセンターの役割を果たす」の三つだ。


寝室にシャワーがあるが、離れの五右衛門風呂も利用できる。


円筒形の寝室にはテレビも時計も置いていない。

「ただいま」と言ってもらえる宿

開業当時、照博はまだ退職前で役場勤めだった。農家の主婦が切り盛りできる範囲でやっているヨーロッパの農家民宿を参考に、禮子1人でできる範囲で経営するということで、宿泊人数は最大4組8人とした。

宿の名前のコクリコは、フランス語で「ヒナゲシ」を指す。与謝野晶子の歌「ああ皐月（さつき） 仏蘭西（フランス）の野は火の色す　君も雛罌粟（コクリコ）　われも雛罌粟」から取った。先に渡仏した夫の

農家民宿を文化と交流の発信源に

鉄幹を追って列車でフランスに入り、火のように赤いヒナゲシが一面に咲き誇っているのを見て詠んだとされている。

「この歌を、与謝野晶子がヒナゲシの咲く野で、コクリコクリとうたたねをしている様子を詠んだと私たちは解釈しました。うたたねをしながらのんびり過ごせるようにと宿の名前にしました」（照博）

宿を開いてからも「常に学ぶ姿勢がないといけない」（照博）と勉強を欠かさない。2005年には2人でドイツを訪れ、農家民宿を泊まり歩いた。町のインフォメーションセンターでおかみさんの話の聞ける宿がないか尋ね、実際に寝起きして、どんなもてなしをしているのか見聞きした。また、照博は母校である愛媛大学でマーケティングを学んだ。

宿の利用者にはリピーターが多く、「ただいま」と言ってきてもらえるような宿にしたいと心がけている。それと同時に「来るたびに新しい発見と感動がないといけない」（照博）と工夫を凝らす。

訪問者との交流を象徴するのが、母屋の2階にあるギャラリースペースだ。ここには愛媛の特産を宿泊客に知ってもらおうと砥部焼を窯から取り寄せて展示しているほか、地元の人の描いた油絵や工芸作品などを飾っている。中には子供がクレヨンで描いた作品もあって「あの絵は今もう大学4年生になる女の子が小さいときに描いたものです」と照博が教えてくれた。澄んだ色使いの水彩画を見つけて「これは」と尋ねると、「ジブリの男鹿和雄さんが内子を訪れたときに案内をして、そのご縁で描いていただいたものです」という答えが返ってきた。

「妻が経営者で私は番頭ですから、町の話をするのが私の役割。そうやって24年間やってきました」（照博）

客層は親子連れからシニア世代、今では外国人も多い。誰が訪れてもゆったり過ごしてもらいつつ、地元の良さを伝えることを忘れない。二人三脚で切り盛りする宿は、開業からの四半世紀の中で蓄積した歴史を背負いつつ、新たな縁をつむぎだそうとしている。（文中敬称略）



ギャラリーには地域について知ってもらうための品、住民や宿泊客の作品が所狭しと並ぶ。



裏側をなぞると字が浮き上がってくる葉。宿泊客の満足度を高める工夫の一つ。